

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：11302
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2018～2023
 課題番号：18K02382
 研究課題名（和文）教職ア krediteーションの在り方に関する探究 - グローバル世界における近接と自律

研究課題名（英文）Inquiry into the normative way of teacher accreditation: Proximity and autonomy in a global world

研究代表者
 本図 愛実（Honzu, Manami）
 宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・教授

研究者番号：70293850
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：教育成果のグローバル化が進展する世界の中で、我が国の教職ア krediteーション（質保証の認定）について、国際標準との近接と自律を鍵概念として検討した。まずは、アメリカを中心とする「教師効果研究」について、その派生や影響について歴史的な経緯を含め分析を行い、学力テストの結果のみを教育成果の「エビデンス」とすることに対する代替の可能性を探った。つぎに、主体と内容を観点として、ア krediteーションの在り方を探求し、政策科学としての理論化を試み、エコシステムとして教員を同心円の中心におきながら、教員育成コミュニティの全アクターが、教職の質保証と社会的認知の向上に関わるべきとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 国際標準との近接と自律を鍵概念として、教職の社会的認知においては、ウェルビーイング論、教師のつながりとしてのソーシャル・キャピタル、価値期待モデルに基づく学校経営、の三観点からの有機的な捉え方が有効であると考えた。教師たちのつながりとしての研究活動について、質を高め、時間を保障していくことが教師のウェルビーイングにおいて有用であることなど、ウェルビーイングとソーシャル・キャピタルの関係性を明確にした。地域社会縮減時代を見据え、教員育成コミュニティ総がかりで教職の質保証に取り組むべきとすると、教員政策の在り方を提示している。

研究成果の概要（英文）：In a world where educational outcomes are increasingly globalized, this paper examined the key concepts of Japan's teaching accreditation (quality assurance certification), focusing on proximity to international standards and autonomy. First, we will analyze the origins and influence of "teacher effectiveness research" centered on the United States, including its historical background, and explore possible alternatives to using only academic test results as "evidence" of educational outcomes. I searched. Next, we explore the nature of accreditation from the viewpoints of subject and content, and attempt to theorize it as a policy science. We place teachers at the center of concentric circles as an ecosystem, and all actors in the teacher education community are involved in the teaching profession. They should be involved in quality assurance and improving social recognition.

研究分野：教育の制度・経営

キーワード：教員政策 ウェルビーイング 学力向上 学校組織マネジメント 教師ソーシャル・キャピタル サーバント・リーダーシップ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の教員制度においては、それを支える学術理論が十分に体系化されているとは言い難い。一般的な専門職論だけでは他領域との競合を基に展開されている政策論への本質的な批判となり得ず、政策科学(政策決定の改善に資する合理的判断の根拠)の見地に立つ理論の生成が望まれる。

そこで本研究では、ア krediteーション(質保証の認定)に着目し、質保証認定の主体と内容の在り方について、「教師効果研究」の構成の解明や、教職をめぐるグローバル化の実態に迫ることにより追求することとした。

アメリカで派生し発展してきた「教師効果研究」は教育成果をグローバル世界で共有することの一助となっており、そこでは教師の仕事の成果を学力テストの結果に置きかえることが統計学を背景に是とされている。それらに対する課題意識から、学力テスト結果以外にもグローバル標準として効果測定を行うことはできないのか検討を行う。ただし、学力の一覧化を一面的に否定するのではなく、グローバル世界での合意形成を視野に、自律的に教職の高度化を進めていく制度設計について探求し、規範理論としていくことが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育成果のグローバル化が進展する世界の中で、我が国の教職ア krediteーション(質保証の認定)について、誰が何を認定すれば「最適」となるのかを明らかにする。すなわち、教職の社会的認知(ア krediteーション)の在り方を国際標準への近接と自律を鍵概念として検討する。

3. 研究の方法

第一に、教員養成を支える理論について、専門職論だけでは脆弱であるとの認識から、主体と内容を観点として、ア krediteーションの在り方を探求し、政策科学としての理論化を試みる。

第二は、アメリカを中心とする「教師効果研究」について、その派生や影響について歴史的な経緯を含め分析を行い、学力テストの結果のみを教育成果の「エビデンス」とすることに対する代替の可能性を探ることである。

4. 研究成果

アメリカにおける効果的学校論から効果的教師論が派生してきた状況について、「学校の「効果」に関する問いの変容」として、『グローバル時代のホールスクールマネジメント』の第4章としてまとめた(2021年、ジダイ社)。同書ではまた、教員政策の在り方として、エビデンスの重視と活用、学校を構成する教職員全員が専門職として機能することの重要性について、複数の研究者と実務家各位の知見を提示してもらう形をとった。

教員に関する国際標準生成の分析の結果について、「OECDが描く教師像 - well-being という『アイディア』の中で」として、宮城教育大学教職大学院紀要創刊号(2020)に発表した。ウェルビーイングというグローバルな価値に対し、その近接と自律の可能性を自己有用感を掲げるローカルな学校経営の成功例にみいだした。

そのような学校経営の成功例から、それをとりまく自治体といった政治的、制度的、文化的文脈を解きほぐしながら、学校経営の在り方を見ていくことが必要と考え、社会的期待の高い学力向上について、自治体全体の向上を実現した教育長・校長のマネジメントについて、サーバント・リーダーシップの好例として分析を行った(「サーバント・リーダーシップで捉える教育長像～期待によるアイデンティティの形成」宮城教育大学紀要 57, 2022)。

ウェルビーイングについてはさらに、教職員支援機構プロジェクトのプロジェクトリーダーとして取りまとめた研究成果を踏まえつつ、『日本の教師のウェルビーイングと制度的保障』(2023, ジダイ社)としても研究成果を公刊した。OECDの教員調査である TALIS で示されている、教職専門性とそのための推奨政策を踏まえ、教職の質保証と社会的認知の在り方を探った。高度な専門職としての社会的認知の指標として若者に人気の職か否かがあると考え、若手教員の働きやすさについても検討した。X市教職員の意識調査の質問項目について企画した他、初期準備段階としての教育学部学生意識調査を行った。それらから、若手教員も学校づくりの有力な一員であることを実感できる学校マネジメントの見直しが示唆された。

OECD ウェルビーイング論では、未来のためのウェルビーイングの一要素として、ソーシャル・キャピタルが重要視されている。これに示唆を得て、教師ソーシャル・キャピタルを可視化していく作業を行った。戦前の宮城県師範学校附属小学校における教師たちの研究と及川平治を例として検討した(「仙台市教育研究所に連なる教師たちのソーシャル・キャピタル～宮城県師範学校附属小学校を媒介とする社会的ネットワーク」宮城教育大学大学院紀要第4号, 2022)。

ウェルビーイングと教師ソーシャル・キャピタル、およびその関係性については、教育新聞に10回の連載記事としても、「教師のウェルビーイングを問う」と題して研究成果を公表した。内実や関係性は下図のタイトル一覧のようになる。

最終年度には、教師のつながりとしてのソーシャル・キャピタルについて、「外部性」の実証

研究に焦点をあて、「地域社会縮減時代の教師ソーシャル・キャピタル～宮城教育大学附属小学校における地域学習教材開発・改善と広がり」として論文化した。同附属小学校の実践の深化・価値の共有が、地域の公立学校に伝播し、新たな実践を導いたことを「外部性」として可視化を試みた。

以上の研究成果の総まとめとして、教員養成・政策の規範理論として、ごみ箱モデルからの脱却と、エコシステムとして教員を同心円の中心におきながら、教員育成コミュニティの全アクターが、教職の質保証と社会的認知の向上に関わるべきであることを「ポスト・アカウンタビリティ時代の教員資質能力向上 総合性と専門性の混迷を超えて」（日本教育経営学会紀要第66号, 第一法規, 2024）において提示した。

【本図愛実「教師のウェルビーイングを問う」】

第1回	ウェルビーイングという発明
第2回	計器盤としてのウェルビーイング指標～日本全体について
第3回	計器盤としてのウェルビーイング指標～教育について
第4回	ウェルビーイングとしてのソーシャル・キャピタル
第5回	日本におけるウェルビーイングの追求～政府の動きから
第6回	主観に関するデータの陥穽
第7回	ウェルビーイング伸長の起点として～学校は快適な空間か
第8回	ウェルビーイング伸長の起点として～二つのリーダーシップ
第9回	社会的資本としての「社会に開かれた研究」
第10回	社会的資本としての「社会に開かれた研究」～プラットフォームとなりうるか

*教育新聞（2023年5月20日より同紙ホームページで10回連載）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 本図愛実、信太昭伸、佐々木孝徳、板垣英恵、佐藤拓郎	4. 巻 5
2. 論文標題 地域社会縮減時代の教師ソーシャル・キャピタル～宮城教育大学附属小学校における地域学習教材開発・改善と広がり	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 71-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 4
2. 論文標題 仙台市教育研究所に連なる教師たちのソーシャル・キャピタル～宮城県師範学校附属小学校を媒介とする社会的ネットワーク	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実・丸山千佳子	4. 巻 57
2. 論文標題 サーバント・リーダーシップで捉える教育長像 ～期待によるアイデンティティの形成～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 1
2. 論文標題 課題の設定	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の教師のウェルビーイングと制度的保障	6. 最初と最後の頁 4 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 1
2. 論文標題 初期準備段階としての教育学部学生意識調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の教師のウェルビーイングと制度的保障	6. 最初と最後の頁 103 - 128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実、丸山千佳子	4. 巻 56
2. 論文標題 期待 価値モデルによる「効果的学校」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 335 - 347
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 55
2. 論文標題 構成主義から捉える教職アクレディテーション	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 295 - 305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 1
2. 論文標題 OECDが描く教師像 Well-beingという「アイデア」の中で	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤恭子・本図愛実	4. 巻 54
2. 論文標題 授業改善を導くミドルリーダーの育成 - 「総合的な学習の時間」を手掛かりとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 401-416
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Manami HONZU and Hanae ITAGAKI
2. 発表標題 Effective use of PISA and national standardized test for enhancing teacher well-being
3. 学会等名 WERA2023(Singapore) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Manami HONZU
2. 発表標題 Functions of Female Science Teachers and Principals in Effective Schools Based on TIMSS and TALIS Results(poster)
3. 学会等名 WERA2023(Singapore) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 師範学校附属学校を媒介とする教師ソーシャル・キャピタル～及川平治と小林佐源治
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 教職はブラックか？～データで捉えるウェルビーイングへの貢献
3. 学会等名 日本教育経営学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 Leadership and Management in New Era of Japan
3. 学会等名 日本教育経営学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 子どもの成長の可視化に向けて - チームによる挑戦 -
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 期待 価値モデルによる「効果的学校」
3. 学会等名 日本教育経営学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 グローバル世界における教職ア krediteーション
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 OECD・TALIS調査における生涯学習というディスコース
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 OECD「教師の主観的幸福」追究の政策的可能性
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 本図愛実編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ジダイ社	5. 総ページ数 181
3. 書名 日本の教師のウェルビーイングと制度的保障	

1. 著者名 丸山千佳子, 本図愛実	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ジダイ社	5. 総ページ数 230
3. 書名 グローバル時代のホールスクールマネジメント	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------